

1 研究主題

【学府教育目標】 『互いを認め 未来をともに創る子』の育成

【校訓】 強く 正しく 美しく

【学びづくり部重点目標】 基礎・基本を身に付け、「わかった」を実感する子

【研究主題】 「わかった」「できた」に結び付く授業づくり

～「わかった」「できた」が次の「わかった」「できた」に結び付く姿を目指して～

(1) 主題設定の理由

学府教育目標は『互いを認め 未来をともに創る子』の育成である。この目標を実現するためには以下が必要である。

- ①自分や相手のことをよく知り、周りの人と認め合う機会を増やすことで自己肯定感や自己有用感を高めること
- ②夢や目標を持ち、周りの人達とコミュニケーションを取りながら課題を解決する力を身に付けていくこと

その中で特に学習においては、今、自分は何が分かっている、何が分からないのかを把握したり、自身が見つけた興味のあることや課題に対してどうしたら解決できるかを見だし、解決しようとしたりする力（学びに向かう力）を育てていくことが重要となる。

本校の児童は、教師や親などの大人から指示され、自身も納得したことにはきちんと取り組むことができる一面がある。しかし、指示待ちの傾向が強く「自主・自立」に乏しい面がある。

一昨年は、研究主題を『「わかった」「できた」に向かっていることを実感できる授業づくり』と設定し、主に単元デザインの研究を行った。そして、昨年度は、研究主題を『自己を振り返り、「わかった」が実感できる授業づくり』と設定し、主に「授業づくり」と「学級づくり」の2本の柱で研究を進めた。「授業づくり」では、単元のゴールを共有し、子どもに学びの見通しを持たせたり、子どもが学びを振り返り、学びを調整できる場を設定したりするなど、単元を通した授業デザインを行った。「学級づくり」では、学習規律を徹底したり、話し合い活動を取り入れたりし、子ども同士のよりよい関係づくりを通して支持的風土の醸成を目指した。

成果として、教師が子どもの実態を捉え、単元全体を通して最終的に目指す姿や付けたい力を明確にすることができた。また、子どもが学びたいと思う学習課題の設定をすることで、子どもが自分事として考え、見通しを持つことができ、「授業をやりたい」や「楽しみ」という声が出て、意欲的に授業に取り組めるようになってきた。

しかし課題として、2本の柱になり、研修すべきことが焦点化しにくくなったため、教師は単元を通して子どもがどれだけ「わかった」のか把握するのが難しかった。また、1時間の授業で「わかった」と実感できていても、次の授業になると忘れてしまったり、曖昧になってしまったりして、単元を通して「わかった」ことが定着せず、次に結び付いていかない子どもが見られた。

そこで、今年度の研修では、学級づくりを授業の土台としながら、研修を進めていくことを焦点化をするために「授業づくり」の柱である「単元デザイン」に一本化する。昨年度の研修を継続しつつ、単元のゴールを子どもと共有し、学びの見通しが持てる単元をデザインする。また、1時間の授業で「わかった」と実感しても単元を通して「わかった」ことが定着せず、結び付いていかないという実態から、学びの振り返りや学びを調整する場を意図的に設定する。そして、自分の言葉で相手に説明する活動を取り入れ、「わかった」が定着できるようにする。さらに、教科担任制のさらなる推進や学年担任制が始まることも含め、「子どもの姿で語る」ことを全職員が意識することで、さまざまな視点から子どもの良い表れを見付け、他の教科にも生かせるようにする。

研究を進めるにあたり、検証する教科は各教師1人1人が決める。子どもが「わかった」を実感し、その「わかった」が次の「わかった」に結び付く姿を目指し、日々の授業改善を進めていく。

(2) 目指す授業像・子ども像 (別紙：イメージ図)

3 研究の内容

(1) 研究の仮説

単元のゴールを子どもと共有し、学びの見通しを持たせたり、前学年や前時の内容など学びの振り返りや学びを調整したりできる場、得た知識を活用できるような場面を設定したりすることで、子どもや教師も「わかった」を実感し、その「わかった」が次の「わかった」に結び付くことを実感できるだろう。

「子どもの姿で語る」ことを意識することで、子どもが学びのゴールとなる付けたい力に向かっていたかが分かり、さらに子どもの良い表れを見付けることができるだろう。

(2) 仮説追究のための手立て

- ・ **単元のゴールを子どもと共有し、学びの見通しを持たせるために (自分事)**
 - ・ 教師が子どもの実態を捉え、単元全体を見通し、付けたい力を押さえる。
 - ・ 「(教師が) 教えたい」から「(子どもが) 学びたい」になる学習課題を設定する。
- ・ **学びの振り返りや学びを調整できる場を設定するために (自己調整)**
 - ・ 前学年や前時まで学習した内容を確認したり、学びの振り返りを行ったりし、自分がどこまで分かっているのか、どこが分かっているのか気付けるようにする。「分からない」を取り上げ、教師や子ども同士で解決できるようにする。
- ・ **得た知識を活用できるような場面を設定するために (活用)**
 - ・ 普段の生活と結び付けたり、子ども同士、自分の言葉で説明したりする活動を行う。
- ・ **「子どもの姿で語る」ことを意識するために**
 - ・ 学びのゴールや前時のもの(ノートやプリント、振り返り等)を残しておき、1時間の授業だけでなく、単元を通して子どもの姿の変容を捉える。
 - ・ 子どもの良い表れを見付け、授業者や学年で共有する。

(3) 研究方法

- ・研修の内容や計画、授業づくりの仕方について、年度当初に職員で共通理解を図る。
- ・研究授業については、研究推進委員会で指導案検討を行う。事前に共通理解できる場で単元計画と本時案、前時とのつながりやこれまでの板書、子どもの様子が分かるものを配り、参観者が子どもの変容を見取れるようにする。
- ・一人一研究については、一人ひとりが検証の場（道徳と総合を除く教科）を決める。中途もしくは終末を公開する。授業を行う日時を1週間前までに決め、研修主任と主幹に伝え、週報等で確実に共有する。指導案は、前日までにミライム等で配る。
- ・研究授業や一人一研究どちらも導入・中途の日時もミライム等で全職員に伝える。
- ・同じ学年の職員（5、6年生の場合は学年団の可能性あり）や同じ教科を担当している職員等を中心に事後研を行う。
- ・授業を参観後は、子どもの価値付けを行う。
（1時間や単元を通して身に付いた力や学ぶ姿、見つけた子どもの良い表れなど）

授業研究のイメージ

(ア) 授業公開

全体研修では、中途もしくは終末を参観する。

(イ) 全体会

① 授業者の反省・質疑応答

中心授業を含め、単元通しての反省の場や質疑応答ができる場を設定する。

子どもの姿で語ることを授業者も意識する。

② グループでの話し合い

視点① 単元デザインについて

単元のゴールの内容、付けた力が身に付いていたか など。

視点② 子どもの姿で語る（自分が見ていた子どもを中心に）

学びの振り返りや学びを調整できる場を設定するなど、さまざまな手立ては有効であったか。

前時との変容。友達や教師の発言（声掛け）等での子どもの変容。

良い表れ、話したり書いたりしている内容、表情など。

※単元のゴールの内容や授業者の思い等により変更の可能性あり

③ 全体共有

次につながる
わかった!できた!
「次は何だろう?」



終末
「わかった!」
「できた!」
ゴール

中途
「わかってきた!」
「できてきた!」

導入
「やってみたい!」
「これを学ぶのか!」



子供の実態
「わからない」
「何を学ぶの?」

スタート

単元デザイン

わかった!できた!から進もう

わからない!できない!から戻ろう

